



# 鐘の音

NO. 25

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2022.7.29

令和4年度、新たなメンバーを迎えた教職大学院生活スタート！

今年度は、現職院生10名と学部卒院生5名を迎え、22名が学びを深めています。

コロナ禍ではありますが、これを機にICTを上手く活用しながら、元気あふれるメンバーで教師力を向上させています！



ZOOM とのハイブリッドで実施した研究構想発表会

## 教職大学院生 今年の抱負・座右の銘

### ◇現職院生2年次

今井 彩 さん…初志貫徹。

大塚 邦子 さん…健康第一。今できることを考えて実行する。

### ◇現職院生1年次

飯塚 正純 さん…心身の健康と学び続ける気持ちを大切に頑張ります。

石井 志徳 さん…座右の銘は「吾唯足知」ですが、大学院ではどん欲に学びます。

菊池 高之 さん…positive mental attitude(積極的思考)。

小林 正明 さん…「周りの人の話をよく聴いて、理論を吸収し、自分の言葉で話せるように」がんばります。

嵯峨 静人 さん…よく学び、よく遊べ。

佐々木 公 さん…今年は何事も早め早めに取り組みます。私にとっての危機管理第一歩です。

菅原 渉 さん…わたるの世間に鬼はなし。

鈴木 貴子 さん…全ての出会いに感謝、学びに感謝、充実した環境に感謝。

高橋 華子 さん…「今、私にできること」未来志向で取り組みます！

渡部 和朝 さん…失敗なくして挑戦なく、挑戦なくして成長はない。

#### ◇学部卒院生2年次

- 浅野 匡平 さん…無理せずほどほどに。  
阿部 倫己 さん…昨日から学び、今日を生き、明日へ期待しよう。  
佐々木健真 さん…毎日楽しみながらコツコツ努力を重ね、大きく成長できる1年にします！  
嶋崎 友貴 さん…不撓不屈。  
平塚 達也 さん…水滴石を穿つ。

#### ◇学部卒院生1年次

- 亀山 雄矢 さん…やさしくなりたい。  
須藤よしの さん…目標に向かって一日一日を大切に頑張ります！  
武石 早穂 さん…何事も「成長志向」で頑張ります！  
佐藤茅奈美 さん…大丈夫、全てうまく行っている。  
山田有輝也 さん…人に優しく、自分に優しく。

### 4年ぶりの専攻長について

教職実践専攻長（教職大学院）  
教授 佐藤 修司

秋田大学の教職大学院は2016年度発足ですので、この2022年度は7年目を迎えたこととなります。今年の入学生は7回生、7期生となります。発足時、私が教育実践研究支援センター（現在の教職高度化センター）長兼教職実践専攻長を2年間務めましたので、4年間のブランクを経て復帰・復活しました。この6年間の歳月は大きなものがあります。2014年度からの文科省とのやり取りを含め、本教職大学院の骨格を、既存のものを参考にしながら組み上げたものの、机上と実際とは大きく異なり、2016年度の初年度は試行錯誤でした。まだ、旧修士課程のM2の院生（社会科）が今の鳥海ルームに居ましたし、マネジメントは太平ルーム、現職は十和田ルーム、学卒M1は雄物ルームというように今の職員室的分け方をしていませんでした。2年目、3年目と徐々に今のスタイルができあがったわけです。

6年間で教職大学院の専任教員のメンバーもだ

いぶ替わってきました。また、もう一つ違うのは、マネジメントの院生の人と私との年齢差です。発足時、私は53歳でした。同年齢くらいの人もいたわけですが、今は59歳、今年60歳になり還暦をめでたくも迎えます。マネジメントの人たちとはだいぶ歳が離れてきました。教師全般にそうですが、目前の児童生徒学生院生の年齢は同じでも、自分は歳を取り、1年経てば1年、10年経てば10年離れていきます。教師にとっては去年も今年も来年もその価値に大きな差はなくとも、受講者にとっては重要な意味を持つ、かけがえのない1年であることを肝に銘じて取り組みたいところです。もちろん、私にとっても教師生活の終わりを見据えて悔いのない教育実践に取り組むことが課題です。去年と同じ今年、今年と同じ来年であっていいわけではありません。みなさんとともに今年の、今この時の価値を高めていきましょう。

## 教職の醍醐味

教職実践専攻（教職大学院）

特別教授 近江谷 正幸

縁あって皆様と御一緒することになり、新しい環境に戸惑いながらもどうにか過ごしている。学部生を対象とした「教職入門」や「初年次ゼミ」も担当し、教職の魅力とは何か、考える機会があった。

そもそも自分はどのようにして教師になったのか。振り返ってみると、始まりは高校3年の春だった。ひょこひょこっと教室に入ってきた先生の、独特の語り口で繰り広げられる日本史の世界に引き込まれ、のめり込んでいった。それまで、歴史は暗記科目だと思ひ込み、日常生活では何の役にも立たない科目だと毛嫌いしていたにも関わらず、歴史の虜になっていった。我が家は菓子屋だったので、家業を継ぐこと以外の選択肢をもっていなかったのだが、大学で本格的に歴史を勉強したいと思うようになり、文学部史学科に進む決意をした。あのとき、今は恩師となったあの先生の授業を受けていなければ、今ごろは和菓子やケーキを作っていたに違いない。教師は、時に人の一生を大きく変える。あの先生が私の人生を変えたように、自分も誰かの人生を変えて

みたい、いや、そんな大それたことはしなくても、歴史が暗記科目ではないということを伝えたい、歴史を毛嫌いしている生徒に歴史の面白さを語りたい、ヒストリーのストーリーテラーになろう、というのが、私の教職人生の原点であった。

いま振り返って、その思いが達成されたのかどうかは分からない。ただ、この前、本学の事務職員である教え子が、私の名前を見つけたとあって訪ねてきてくれた。卒業して25年くらい経っているのだが、一瞬であの頃にタイムスリップすることができた。また、別の教え子の子どもさんが、本学に在籍していることも判明。そして、何とんでも、この春卒業証書を渡した卒業生が学部生の中にいることの不思議さ、面白さ。こういうところが教職の醍醐味だろう。

私の恩師は数年前に亡くなったが、今でも私の心に生き続けている。自分もかくありたい、と思っている。

## 教職大学院に入学して

学校マネジメントコース

現職院生1年次 石井 志徳

秋田県の高校教員として採用されてからの26年間を振り返ると、まさに実践の日々であったと思う。県立高校では、新たな理論を少し齧っては、その本質をよく理解しないままに生徒に向き合い試行錯誤をくり返す日々であった。博物館や生涯学習課では、手探りの中、調査研究や様々な業務にあたる日々であった。

今年の4月からの1年間、思いがけず教職大学

院で学ぶ機会を得ることとなり、新たな学びへの喜びを感じながらも、自分に何ができるのか何を成すべきか悩んでいた。4月当初に配付された「秋田に根ざした理論と実践の往還を」と書かれた資料を読み、その不安や心配はさらに膨らんだ。「理論と実践の往還」、「実践知の継承と新たな実践知の創造」とは何だろうか。字面からの表面的な意味は分かるがその本質が何かは見えてこなかった。

コロナ禍のためオンラインでの講義となり、大学院での学びの実感を持ってないまま、課題の提出に追われて4月は過ぎた。5月の連休明けから大学の先生や学部卒院生の皆さんと顔を合わせての講義がはじまり、大学院での学びは、これまでの自らの実践を理論的に裏付けたり価値付けたりするものであること、理論を学ぶことで学校での新たな実践への意欲をかき立てるものであることを理解した。さらに、講義の中での現職院生と学部卒院生との協議から、自らの実践の強みや弱みを認知するとともに、次代を担う教員となる学部卒院生の皆さん

が我々の実践知に興味を持ち、それを吸収しようとしていることに気付いた。まさに、教職大学院の学びの意義を実感した瞬間であり、4月当初に配付された資料の本質の一端を理解できた気がした。

大学院での生活も残りの9ヶ月となったが、「理論と実践の往還」を意識しながら、大学院で出会った仲間と明日の秋田県の教育について語り合い、様々な理論の本質に迫れるように努力を重ね、来年度以降の学校での実践に活かせるよう教職大学院での学びを更に深めたい。

### 講義紹介「ふるさと秋田における地域課題教育」

学校マネジメントコース

現職院生1年次 佐々木 公

秋田県教育委員会発行の令和4年度学校教育の指針の中に、本県学校教育が目指すものの1つとして「教師の力量を高める」ことがあげられています。子どもたちが変化の激しい社会を生き抜く力を身に付けることはもちろんですが、そのためには教師が社会の変化に即応した研修を充実させることが大切であるとしています。指針には次のような一文があります。「グローバル化や技術革新、少子高齢化等の進展により生じる教育課題や、社会の動向、地域社会の要請等に的確に対応することが学校に求められている。」本講義の内容はまさにこの一文に一致します。

固い書き出しになりましたが、砕いて言うなら「大人の社会科（秋田県版）」とでも言えるのではないのでしょうか。内容や課題レポートは決して簡単ではありませんが、様々な秋田県の課題について、歴史的背景、時代による変遷、各種データやフィールドワークから得られた知見、社会の動向等々、たくさん先生の専門分野についての講義がオム

ニバス形式で進んでいきます。個人的には、勝手ながらテレビ番組「世界一受けたい授業」や「ニッポンドリル」のような感覚で受講しています。グローバル化と地域コミュニティの関わり。秋田県の産業の現状と県の取組。経済の視点で見る秋田県の産業構造。健康こそが秋田県の課題。秋田県の魅力をどのように発信していくか。そこには見えていなかった秋田の姿、知らなかった課題の背景について多くの示唆がありました。

ふるさと秋田の強みと弱みを知り、どうしたら住みよい秋田をつくることができるのかを考える。それは子どもたちが自分自身の将来を考えることにつながります。総合的な学習の時間に教科横断的な内容として地域課題の解決策について探究したり、キャリア教育として自分の将来と関連づけて考えたりすることによって、「ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり」を目指したいものです。

## あと9カ月

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生2年次 浅野 匡平

2019年の4月に教職大学院に入学してから、早くも1年と3カ月が過ぎた。中学高校と授業中に居眠りをしていて自分が、こんなに教育に面白みを感じるようになるとは、想像もしていなかった。

教職大学院での1年間は、非常に楽しく、学びの多い1年間だった。

様々な講義を受けるなかで、秋田の探究型授業を通して、子どもの学びを深めることの大切さを学ぶことができた。また、教師として常に学び続け、自分の力量を高め続けることの大切さと楽しさを学ぶことができた。

そして、現職院生の方々と関わっていくなかで、常に子どものために思って行動する姿勢を学んだ。

「この先生の下で働きたい」「この人が担任の先生がいい」と思わせてくれるような、まさに教師の手本のような方々で、その一生懸命な姿に憧れた。そんな現職院生の方々とともに学ぶことができる教職大学院での学生生活は、本当に貴重な時間だと

感じている。

私は学部生のころを含めれば5年の間、教師を目指して学び続けてきたことになる。あつという間の5年だったが、いろいろな日があり、様々なことを経験できた。

朝起きられずに遅刻して、教授に叱られた日もあった。講義の内容が面白くないと、無断で休んだ日もあった。実習授業が上手くいかずに、涙を流した日もあった。子どもの言動が理解できず、関わるのが怖いと思った日もあった。それでも、子どもの満点の笑顔に元気をもらう日々が、私をここまで成長させてくれた。

教職大学院で学ぶ残りの9カ月。この9カ月もきつとあつという間で、様々なことを経験するのだろう。苦しくても、楽しくても、私は気持ちを切らすことなく駆け抜けようと思う。

スタートラインは、もう目の前だ。

## 教職実践インターンシップIでの学び

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生1年次 山田 有輝也

「教職実践インターンシップI」とは、学部卒院生一年次を対象とし、一年間を通して行う実践実習科目です。大学での学びを実際の現場で、深めることができます。今年の実習では、秋田大学の附属四校園で、それぞれ一日ずつ行った後、自らの希望校種にて実習を行いました。四校園の実習では、校種の特徴や共通点や相違点、課題について学ぶことができました。その中で、特に印象的に残っているのは、初めて参観した附属幼稚園でのインターンシップです。

附属幼稚園では自由保育を中心として、子ども

の主体的な遊びが展開されていました。学校現場では、教師がルールをひき、子どもを誘導していく、「指導的な指導」が行われることがあります。その一方で、幼稚園の自由保育の場では、子どもの「やってみたい」を大切にしています。また、「この子は今どのような思いを持っているのだろうか」というような、気持ちに寄り添った関わりについても学ぶことができました。他の学校種においても、子どもの「知りたい」「やってみたい」という気持ちを生かすこと、思いに寄り添った関わりをすることは、大切なことだと考えました。たった一日の幼

稚園実習でしたが、子どもの気持ちが前面に表れた遊びの中から、数多くの指導のヒントを得ました。

四校園の実習が終わった後に、それぞれの希望校種での実習が始まります。私は附属特別支援学校で実習を行いました。配属学級における子どもとの関わりだけではなく、高等部の現場実習の同行、公開研究協議会への参加、作業学習の授業参加などの様々な経験を積むことができました。

インターンシップを通して学んだことをこれからの自分の実践、研究に生かし、教師としての確かな力量を身に付けていこうと思います。



大学院生グループで与次郎駅伝に参加しました！

## 8～10月の行事予定

2022年

8月 5日(金) 2年次現職院生中間報告会  
惟路の会

9月 16～18日 日本教師教育学会 秋田大会

9月 27日(火) 研究計画・中間報告発表会

10月 14～15日(土) ふるさと秋田の教育資源とカリキュラム開発巡検